

口永良部島の火山活動解説資料

福岡管区气象台
火山監視・情報センター
鹿児島地方气象台

<噴火警戒レベル 5（避難）が継続>

口永良部島では火山活動の高まった状態が継続しています。

昨日（20 日）、九州地方整備局の協力により、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した上空からの観測によると、新岳火口周辺や山体斜面に新たな火砕流¹⁾の痕跡は認められませんでした。新岳火口の形状に特段の変化は認められませんでした。

また、昨日、東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所及び気象庁が実施した観測では、二酸化硫黄の放出量は 1 日あたり 1,700 トン（前回 6 日 1,200 トン）と多い状態でした。

今後も、5 月 29 日と同程度の噴火が発生する可能性があります。

【防災上の警戒事項等】

大きな噴石の飛散及び火砕流の流下が切迫している居住地域では、厳重な警戒（避難等の対応）をしてください。

屋久島町の避難等の指示に従ってください。

風下側では火山灰だけでなく小さな噴石が風に流されて降るため注意してください。

降雨時には土石流の可能性があるので注意してください。

新岳火口から半径 2 海里以内の周辺海域では、噴火による影響が及ぶ恐れがありますので、噴火に警戒してください。

○ 活動概況

・表面現象の状況（図 1～4、図 5-①⑤）

昨日（20 日）、九州地方整備局の協力により、気象庁機動調査班（JMA-MOT）が実施した上空からの観測によると、新岳火口周辺や山体斜面で新たな火砕流の痕跡は認められませんでした。噴煙のため火口内の状況は確認できませんでしたが、新岳火口の形状に特段の変化は認められませんでした。

6 月 18 日 12 時 17 分の噴火以降、ごく小規模な噴火を 2 回確認しています。

この火山活動解説資料は福岡管区气象台ホームページ (<http://www.jma-net.go.jp/fukuoka/>) や気象庁ホームページ (<http://www.data.jma.go.jp/svd/vois/data/tokyo/volcano.html>) でも閲覧することができます。

この資料は気象庁のほか、海上保安庁、国土地理院、京都大学、東京大学、国立研究開発法人防災科学技術研究所、国立研究開発法人産業技術総合研究所および屋久島町のデータも利用して作成しています。

資料中の地図の作成に当たっては、国土地理院長の承認を得て、同院発行の『数値地図 50mメッシュ(標高)』を使用しています（承認番号：平 26 情使、第 578 号）。

・火山ガスの状況（図5-④⑧）

20日に、東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所及び気象庁が実施した観測では、二酸化硫黄の放出量は1日あたり1,700トン（前回6日1,200トン）と多い状態でした。

・地震や微動の状況（図5-②③⑥⑦）

火山性地震は、6月16日16時頃から多い状態でしたが、18日14時以降は減少しています。

6月18日の噴火に伴い、火山性微動が観測されました。6月19日以降は火山性微動は観測されていません。

- 1) 火砕流とは、火山灰や岩塊、空気や水蒸気が一体となって急速に山体を流下する現象です。火砕流の速度は時速数十kmから数百km、温度は数百℃にも達することがあります。



図1 口永良部島 新岳の状況（本村西遠望カメラ）

6月18日12時17分の噴火以降、16時31分及び19日09時43分にごく小規模な噴火を確認しました。

国土交通省災害対策ヘリコプターはるかぜにて撮影



国土交通省災害対策ヘリコプターはるかぜにて撮影



図2 口永良部島 新岳西側及び東側の状況（2015年6月20日）
新たな火砕流の痕跡は認められませんでした。



図3 口永良部島 新岳火口の状況（左：2015年6月9日、右：2015年6月20日）

- ・新岳火口の形状には特段の変化は認められませんでした。
- ・火口周辺に新たな火砕流の痕跡は認められませんでした。
- ・噴煙のため火口内の状況は確認できませんでした。-

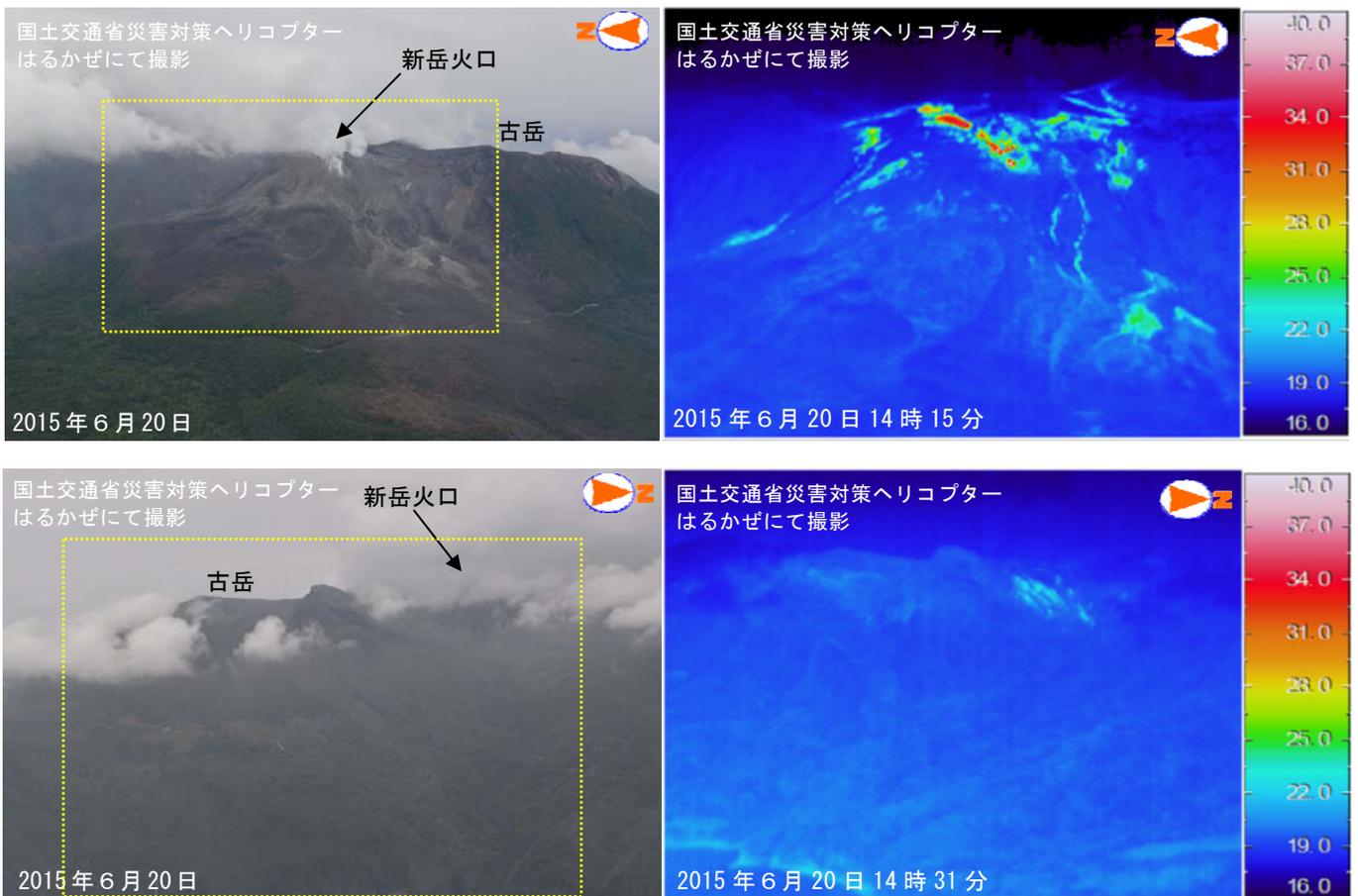


図4 口永良部島 新岳及び古岳斜面の状況（2015年6月20日）

（黄色破線は右の熱画像の範囲を示す）

- ・新岳及び古岳の斜面に新たな火砕流の痕跡は認められませんでした。
- ・新岳火口の西側割れ目付近で熱異常域が認められました。
- ・新岳の西側斜面及び東斜面で5月29日の火砕流跡と考えられる熱異常域が認められました。

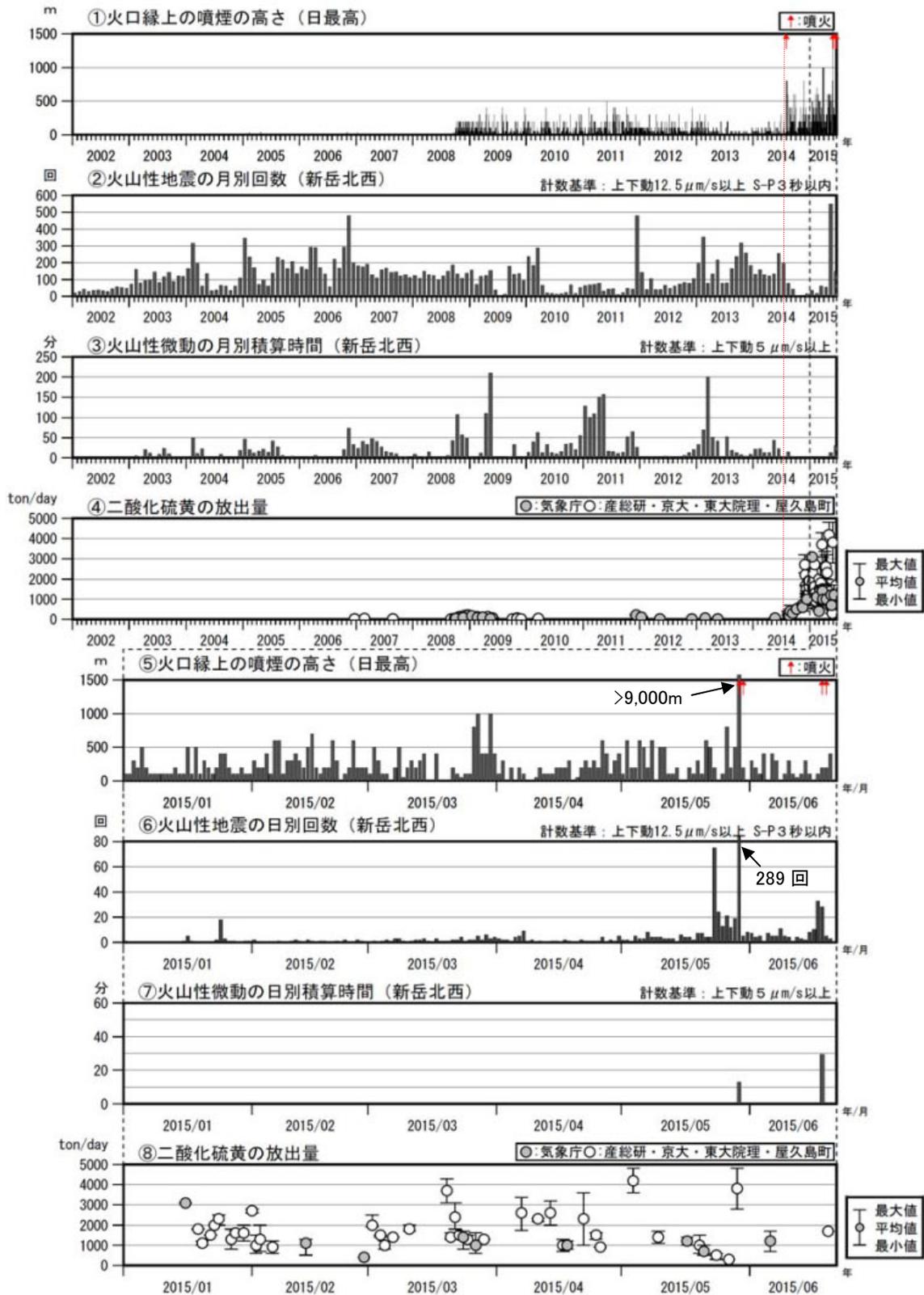


図 5 口永良部島 火山活動経過図 (2002 年 1 月～2015 年 6 月 21 日 12 時)

- ・ 20 日に、東京大学大学院理学系研究科、京都大学防災研究所及び気象庁が実施した観測では、二酸化硫黄の放出量は 1 日あたり 1,700 トン (前回 6 日 1,200 トン) と多い状態でした。
- ・ 火山性地震は、6 月 16 日 16 時頃から多い状態でしたが、18 日 14 時以降は減少しています。

※2014 年 8 月 3 日の噴火により、火口周辺の観測点が障害となったため、噴火以降 (図中赤破線後) は新岳火口から約 2.3km にある新岳北東山麓観測点で計数しており、検出力が低下しています。

※2015 年 5 月 23 日に発生した島内のごく浅いところを震源とする地震 (震度 3、M2.3 : 暫定値) が発生したことから、監視を強化するため、5 月 1 日にさかのぼって計数基準を見直しています。

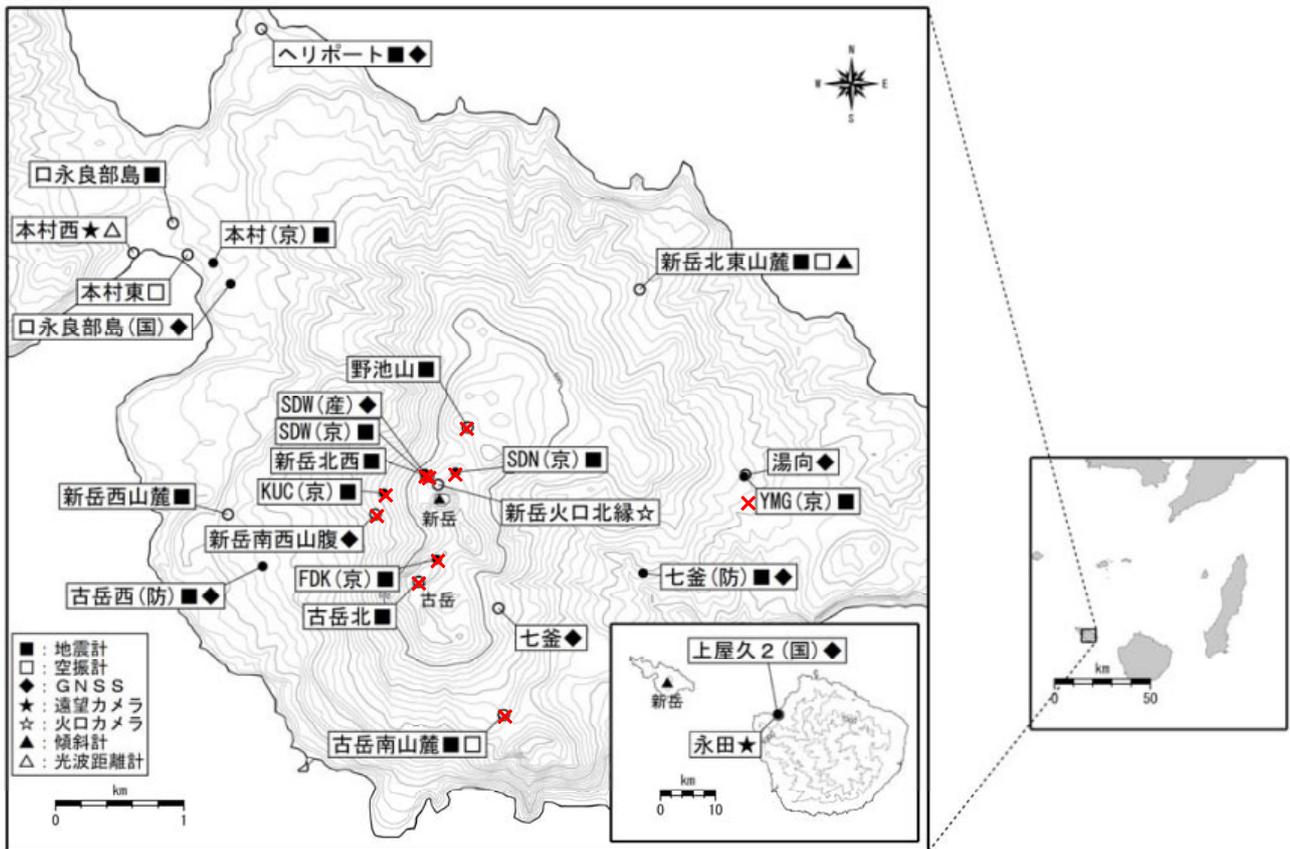


図6 口永良部島 観測点配置図

小さな白丸 (○) は気象庁、小さな黒丸 (●) は気象庁以外の機関の観測点位置を示しています。
 (国) : 国土地理院、(京) : 京都大学、(防) 防災科学技術研究所、(産) : 産業技術総合研究所
 山頂周辺の観測点 (図中赤×印) は、2015年5月29日の噴火以前から障害となっています。